

宮沢賢治の童話と J.S. バッハの音楽

— 「雪渡り」と「フランス組曲」 —

西野 美穂

抄録：本研究は、筆者がピアノ演奏会において宮沢賢治の「雪渡り」を朗読し、物語の場面に合わせて J.S. バッハ作曲の「フランス組曲第 5 番ト長調 BWV816」をピアノで演奏した試みの記録である。賢治の作品が子どもたちに鑑賞される時には「絵本」という形が一般的だが、この演奏会では大人を対象に視覚的な要素は加えず、音での色彩を加えた。宮沢賢治は西洋音楽を愛し、自らもチェロを演奏したことで知られるが、賢治の作品とともにバッハの作品を演奏することで、この「雪渡り」という作品に新たな息吹を加えられないかという試みである。

1. はじめに

筆者は平成 28 年 3 月 8 日に恵庭市島松夢創館においてピアノソロ・リサイタルを開催した。（*資料参照）その演奏会の前半に、北海道の浅い春にふさわしい絵本として宮沢賢治の「雪渡り」を朗読し、合間に J.S. バッハ（1685-1750）作曲「フランス組曲第 5 番ト長調 BWV816」の舞曲を 1 曲ずつ順にピアノで演奏するという形での上演を試みた。賢治の作品が子どもたちに鑑賞される時には「絵本」という形が一般的だが、この演奏会では大人を対象に視覚的な要素は加えず、賢治の物語の朗読にバッハの曲による音での色彩を加え、新たに現れるそれぞれの作品の芸術作品としての特徴の模索を試みた。宮沢賢治は西洋音楽を愛し、自らもチェロを演奏したことで知られるが、賢治の作品とともにバッハの作品を演奏することでこの「雪渡り」という作品に新たな息吹を加えられないかという試みである。

2. バッハの「フランス組曲」と宮沢賢治の「雪渡り」について

バッハには「フランス組曲」と呼ばれるクラヴィーア用の組曲が 6 曲ある。「フランス組曲」という名称がつけられた理由はわかっていないが、これらの 6 曲が「イギリス組曲」より規模が小さく、軽やかで優雅な「フランス的」性格を持つことに由来すると言われている。魅力的で単純な旋律が随所に見られ、温かい家庭音楽の特徴が感じられる。

第 5 番の作曲年代は明確ではないが、バッハがケーテンの宮廷歌手であったアンナ・マグダレーナ（1701-60）と 1721 年に再婚して間もなく書いたと考えられている。「アンナ・マグダレーナ・バッハのためのクラヴィーア小曲集」の 2 巻のうち第 1 巻にこのフランス組曲はおさめられている。アンナ・マグダレーナはバッハより 16 歳年下の新妻であり、バッハの仕事を深く理解し、有能な助手でもあった。バッハの先妻の残した子供たちにも愛情を注いだといわれ、バッハは家庭的も音楽的にもどれだけこの妻に助けられたかは想像がつくところである。フランス組曲はバッハのこのような時期に作曲されたため、細やかな愛情にみち、軽やかな家庭音楽の性格を持っている。

バッハ時代の「組曲」の基本的な定型は、アルマンド・クーラン・サラバンド・ジグという 4 種類の舞曲を並べたものだが、この第 5 番では「サラバンド」と「ジグ」の間に「ガヴォット」、「ブ

レー]、「ルール」という3つの舞曲が挿入され、フランス組曲全6曲の中では規模の大きいものとなっている。

一方、宮沢賢治の「雪渡り」は雑誌「愛国婦人」の大正10年12月号と翌11年1月号に掲載された童話で、彼が生涯で唯一、稿料をもらった作品と伝えられている。「雪渡り」は「雪渡り その一（子狐の紺三郎）」と「雪渡り その二（狐小学校の幻燈会）」の二部構成となっている。

第一部は、主人公の幼い兄妹、四郎とかん子が狐の紺三郎と出会い、狐の小学校の幻燈会に招待されるまでが描かれている。第二部では四郎とかん子が狐の幻燈会に出かけ、帰ってくるまでが描かれている。典型的な異界訪問譚である。狐の幻燈会は11歳以下の子供でないと入場券がもらえないということになっている。主人公の二人は幼い兄と妹であり、狐たちも子狐である。物語の中にちりばめられている歌謡的なはやしことばの数々は、子どもたちの楽しいことば遊びの世界である。

ドイツ音楽であるバッハのフランス組曲と日本の賢治の童話を組み合わせ、異なる文化の融合として新たな世界を生み出せないかと考えたのが今回の試みである。

3. 「雪渡り」から聴こえてくる音と音楽

宮沢賢治の童話は黙読するのではなく、声に出して読むのがよいと言われる。賢治の文章の随所に現れる擬音語や擬態語「オノマトペ」は賢治の「リズムと響き」に対する鋭敏な感覚から生まれる表現と考えられる。このような感覚は普通、大人になると徐々に失われていくと言われる。賢治の感覚が鋭敏であり続けたことは、彼が地質学の研究者でもあったことと深く関係しているのではないかと考えた。彼が童話の中で表現した言葉の「質感」は彼が愛した鉱石からたくさんのインスピレーションを得たものとする、それは演奏家が音楽を演奏する際の材料としての「音の質感」への感覚に似ているのではないだろうか。音を鉱石に例えると、演奏家はやはり音の粒を質としてのイメージで選択し、音楽を織り紡いでいくのである。

今回の試みのなかでは、バロック時代に使用された鍵盤楽器であるチェンバロやクラヴィコードのために作られた曲を、現代のピアノで演奏するということが課題であった。古典派時代以降に発達してきた現代のピアノという鍵盤楽器の可能性はあまりにも広く、バロック時代の様式をそこなわずにバッハの音楽にふさわしいタッチ、音色などを演奏者が選択していくことは重要な課題である。今回の試みでは、朗読の合間に物語のそれぞれの場面にふさわしいバッハの曲を演奏する際、舞曲特有のリズムのなかでのピアノの音色、質感をバロックの様式感をそこなわない範囲で選択していくという作業も必要であった。

以下、プロットに沿って音楽を挿入した試みを記す。

4. 雪渡り その一（子狐の紺三郎）とアルマンド、クーラント

まず、物語の始まりにフランス組曲第5番の第1曲目の「アルマンド」を演奏する。

アルマンドはゆったりとして歌謡的なドイツ舞曲である。全6曲のバッハのフランス組曲のなかで、この第5番は全曲を通して特に明るく晴れやかな気分満ちているが、中でも第1曲のアルマンドは幸福感とともに澄み切った明るさと穏やかさにあふれ、子どもたちと狐たちの楽しい交流が始まる物語の始まりにふさわしいと考えた。

アルマンドを演奏し終えてから朗読をはじめるが、この場面では「雪はすっかり凍って大理石より

も堅く」「空も冷たい滑らかな青い石の板で出来て」「お日様がまっ白に燃えて百合の匂いを撒きちらし、又、雪をぎらぎら照らし」と情景が詳しく描かれている。それまでの北国の長い冬が子ども達にとっていかに抑制された重苦しい時間であったのかがよくわかる文章である。この情景描写の間に「堅雪かんこ、しみ雪しんこ。」というフレーズが挿入されている。日本のわらべ歌特有の七七調である。先ほどのパッハのアルマンドの余韻が残っている中で、この日本的な七七調のフレーズを朗読すると、物語の情景が一層際立つと考えた。

その後、物語は雪沓をはいた四郎とかん子が「キックキックキック」と森に向かって堅く凍った雪の野原を歩く様子が描かれる。この擬音語によって子ども達の幸福感が自然と表されている。「キックキック」という言葉は後ほどさらにリズムカルに「キックキックトントン」という楽しそうな「はやし言葉」となり、この物語の中で最も印象的な節となるのである。四郎とかん子が森に向かって叫び、子狐が登場する場面となる。ここでのせりふのはわらべ歌のような節をつけて読むこととした。

「堅雪かんこ、しみ雪しんこ。狐の子あ、嫁いほしい、ほしい。」

次に白い狐の子が「凍み雪しんしん、堅雪かんかん。」と言いながら登場する。狐の出現に驚いた四郎が妹を後ろにかばって「狐こんこん白狐、お嫁ほしけりゃ、とってやろよ。」と叫ぶと狐は「四郎はしんこ、かん子はんこ、おらはおよめはいらんよ。」と銀のおひげをピンと一つひねって言う。「およめはいらんよ」という狐のせりふに、大人の世界からは隔絶されていたという子ども特有の願いが感じられる。この狐の言葉に安心した四郎が「狐こんこん狐の子、お嫁いらなきゃ餅やろか」と笑って言う。「お嫁」と「餅」という比較にならない二つを並べるところに、言葉遊びを楽しむ子どもの世界が表現されている。狐が「四郎はしんこ、かん子はんこ、黍の団子をおれやろか。」と言うと、それまで四郎のうしろにかくれていた妹のかん子が勇気をだした様子で、しかし小声で歌う。

「狐こんこん狐の子、狐の団子は兎のくそ。」

このかん子がそっと歌った場面で、子ども達と狐の歌遊びは休止することとなる。それまで歌合戦に夢中になっているうちに忘れていた、狐と出合った時の驚きと不安、「人をだます狐」をかん子は言葉にしてしまったのである。この後、子狐紺三郎は、狐の団子がいかに手をかけて作るものなのかを熱心に説明する。今はお餅を食べて来たからおなかが減っていないと断る四郎たちが、この次におよばれすると約束すると、紺三郎は「みじかい腕をばたばたして」嬉しがる。団子を子どもたちに食べてもらえると知った紺三郎の、子どもたちに信頼されたという喜びようがユーモラスに描かれている。

四郎たちが紺三郎に招待された幻燈会は「この次の雪の凍った月夜の晩」に開かれると紺三郎が言う。雪が凍り、月明かりがないと四郎たちは森へは行けないのである。そして、11歳以下しか入場できないのである。

幻燈会での内容は紺三郎によって説明されるが、酒飲みが酔っ払っている様子、狐が人間のわなにかかっている様子、狐が人間の家へ行き尻尾を焼いた様子という3つの場面である。すべてが人間と狐のユーモラスな失敗譚である事に注目したい。これを紺三郎は「面白いんですよ」と前置きしている。どれもそれほど深刻な結果ではなかった事が想像できる。「ぜひおいで下さい。」との紺三郎の誘いに「二人は悦んでうなずきました。」と、幻燈会でまた会う約束をお互いが楽しみにする様子が描かれている。

ここで第2曲の「クーラント」を演奏し、子狐と子ども達の気分の高揚を表現する事にした。

「クーラント」は「アルマンド」と「サラバンド」の間におかれる、フランスで生まれた3拍子の軽快な舞曲である。テーマは流れるように下降するが、8分音符の動きは躍動的で軽いステップを思わせる。物語の次の場面では「狐は可笑しそうに口を曲げて、キックキックトントン、キックキックトントンと足ぶみをはじめて、しっぽと頭を振ってしばらく考えていましたが、やっと思いついたらしく、両手を振って調子をとりながらうたいはじめました。」と書かれている。歌合戦を始めようとする紺三郎の楽しげな様子を、クーラントを弾くことで表現できると考えた。

次の部分は子狐と子どもたちの歌合戦のような場面となる。子狐と子どもたちが幻燈会への期待をこめ、その内容を面白おかしく歌い踊りながら林の中に入っていく。合間には踊りのリズムとして「キック、キック、トントン。キック、キック、トントン。キック、キック、キック、キック、トントン。」という「はやし言葉」が現れる。言葉のリズム遊びが繰り返されることによって、楽しくて仕方がない狐と子どもたちの気分の高揚が表現されている。この部分を朗読する際には、リズムを刻むテンポを徐々に早めた。聴き手には、先ほど演奏された「クーラント」のバッハ特有の喜びのリズムと、何度も繰り返される「キック、キック、トントン」という言葉の単純なリズムが重なる不思議な感覚があるのではないかと思った。

「雪渡りその一」（子狐の紺三郎）は「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」という物語冒頭のはやし言葉で、子どもたちが家路につく情景で幕を閉じる。

この場面から次の、その二「きつね小学校の幻燈会」までの時間的な空間は「この次の雪のこおった月夜の晩」という子狐の紺三郎の言葉からわかる。また、次の「その二」の冒頭の文章、「青白い大きな十五夜のお月さまがしずかに氷の上山から登りました。」から、満月の夜で、雪が凍るという条件が満たされない限り幻燈会は行われないうこともわかる。もしも雪が凍らない夜となれば、幻燈会の約束は実現されないものとなる。ここでの時間的経過は予測できないと考えられる。ここで、バッハの第3曲「サラバンド」を弾くこととした。ゆったりとした静かな「サラバンド」が演奏されることで、聴き手はそれまでの楽しい歌遊びで得た高揚感を鎮めることができ、物語の次の場面への心理的な転換が緩やかにはかれると考えた。

5. その二「きつね小学校の幻燈会」とサラバンド、ガヴォット、ブレー、ルール、ジーク

「サラバンド」はスペイン起源で、ゆったりとした3拍子の摺り足舞踏である。フランス組曲全6曲の中で、この第5番の「サラバンド」はとくに歌謡的で、魅力的な旋律が朗々と歌われる。また、この曲は「サラバンド」に特徴的な荘重さよりは静けさを感じられ、「狐の幻燈会」という神秘的な異界への旅の導きとしてふさわしいと考えた。

兄弟が森の入り口にきたとき、「胸にどんぐりのきしょうをつけた白い小さな狐の子」がふたりの入場券を確かめて案内をする。この狐の子は「尤もらしくからだを曲げて、眼をパチパチしながら」という愛らしい様子で描かれている。

ここで第4曲の「ガボット」を弾くことにした。その後の狐の生徒たちの様子も「栗の皮をぶつけ合ったり、すもうをとったり、殊におかしいのは、小さな小さな鼠位の狐の子が大きな子供の狐の肩車に乗って、お星様を取ろうとしているのです。」という楽しくにぎやかな描写となっている。「お星様をとろうとしている」幼い狐の子の姿が印象的であることについて、山田は「幼年童話的な世界の不思議さと魅力を読者に実感させるものであろう。」(山田, 2012)と指摘している。

「ガボット」はフランスに生まれ、上流階級で流行した明るく活発な舞曲である。通常は4分の4拍子で第3拍から始まるが、この第5番の「ガボット」は2拍子の軽快な舞曲となっている。3度の音程で下行と上行を繰り返すテーマは無邪気で愛らしく、子狐の愛嬌のあるしぐさに似つかわしい音の動きと考えた。

「ガボット」を演奏後、紺三郎が幻燈会の司会者として登場する場面を朗読する。紺三郎の様子は「まるで立派な燕尾服を着て、水仙の花を胸につけて、まっ白なはんけちでしきりにその尖ったお口を拭いているのです。」と愛らしく滑稽に描かれている。先ほど演奏した「ガボット」の軽快で愉快な雰囲気が残る中でこの部分を朗読すると、聴き手には紺三郎の様子がいっそうユーモラスに伝わると考えた。

その後、紺三郎が「その一」で初めて四郎とかん子を誘ったときに「面白いんですよ。」といった自慢の幻燈会が始まる。幻燈会では、紺三郎が初めて四郎とかん子に出会い、幻燈会へ誘ったあとに、足ぶみをして歌い始めた「キックキックトントン、キックキックトントン」というやし言葉とともに第一の場面、太右衛門と清作がお酒に酔っ払って野原のまんじゅうやおそばを食べようとしている情景が歌われる。狐の子ども達が足踏みをして踊り歌う中、狐の女の子がもてなしに黍団子を運んでくる。「その一」で紺三郎が四郎とかん子にすすめた紺三郎が「ちゃんと私が畑を作って、播いて草をとって刈って、叩いて粉にして練って蒸してお砂糖をかけた」という自慢の黍団子である。紺三郎は「その一」で、狐は「人をだますというむじつの罪をきせられていた」と四郎に話している。「だまされたという人は大抵、お酒に酔ったり、臆病でくるくるしたりした人」とも説明している。太右衛門と清作は酒のせいでへんなものを口にしたのであり、狐に騙されたわけではないのだ。黍の団子を口にすることを一瞬ためらった四郎だが、かん子をうながして食べた黍団子は「頬っぺたも落ちそう」と表現されている。

狐の黍の団子を四郎とかん子が食べたのを見て喜んだ狐の学校生徒は、「キックキックトントン」を繰り返しながら、狐の生徒はうそをつかず、ぬすみもせず、そねまない、と歌い踊る。この情景はこの物語の中でもっともにぎやかなところである。ここではバッハの音楽を演奏せず、物語からきこえてくる音楽のみで読み進めた。

その後、狐のこん兵衛がわなにかかっている絵と、狐のこん助が魚を盗もうとしてしっぽに火がついた絵が映される。人間が酒に酔って失敗した場面を映したあと、狐の作った黍の団子を人間の子どもが食べたのちに、今度は狐が失敗した場面が出てくるのである。ここでは、人間も狐も失敗することはあるが、本質は善であるという賢治の生き物に対する深い愛情と信頼感が示されている。紺三郎がふたたび司会者として現れ、「賢いすこしも酔わない人間の子ども」の四郎とかん子が狐の団子を食べたことに感謝をのべ、幻燈会の閉会を告げる。「狐の生徒はみんな感動して、両手をあげたりワーッとたちあがりました。そしてキラキラ涙をこぼしたのです。」とにぎやかな幻燈会の場面は終わる。

ここで幻燈会の余韻を残したまま、バッハの第5曲「プレー」を演奏することにした。「プレー」は古くはフランスのオーヴェルニュ地方起源の輪舞で、17世紀から宮廷舞曲となった2拍子の舞曲である。この第5番の「プレー」の性格は幸福にあふれたような快活さをもち、狐の学校の生徒たちと四郎とかん子の親密な交流が高まったこの場面にふさわしいと考えた。

その後、紺三郎が二人に感謝を述べながら見送る場面では、狐の生徒たちが追いかけて来て、二人に「どんぐりだの栗だの青びかりの石だの」をふところやかくしに入れる、という微笑ましい場面が

描かれる。二人が森を出て野原を行くと、兄さん達が迎えに来ているのが見える。ここで朗読はすべて終わる。物語を読み終えてすぐに第6曲の「ルール」を弾くことにした。

「ルール」はフランスに起源をもつ穏やかな舞曲で、優美さが特徴とされる。「青白い雪の野原のまん中」と表現されている広い雪原の中で、異界から戻った四郎とかん子と兄弟たちの再会は穏やかであり、安心して満ちたものであることから、この「ルール」を演奏した。先ほどまで繰り返された、にぎやかな子狐たちとの交流の余韻が、4分の6拍子の中で付点音符が緩やかに揺れる「ルール」が演奏されることにより鎮められていくものと考えた。

「ルール」を弾き終えた後、そのまま最後の第7曲の「ジグ」を弾くことにした。「ジグ」はイギリスの「ジグ」に由来するフランス舞曲で、起源はスコットランドまたはアイルランドの舞踊歌である。17世紀から大陸の宮廷舞曲となった、急速で模倣的な組曲の最終楽章である。この第5番のジグは16分の12拍子で、3声のフガートの様式で書かれている。

前曲の「ルール」で鎮められた物語の最後の場面から、この躍動的な「ジグ」を演奏することで、これまでの物語と音楽の流れをすべて断ち切る効果考えた。この「ジグ」の6分の12拍子の中で跳ね回る16分音符の高揚感によって、聴き手は物語とともに進行してきたバッハの音楽から、再びバッハの音楽そのものへと引き戻されるのである。

6. おわりに

宮沢賢治と音楽の本格的な結びつきは、1921年（大正10年）のレコードとの出会いに始まっている。また、花巻高等女学校の音楽教師であった藤原嘉藤治という人物と知り合い、彼からは音楽を教えてもらい、賢治がドイツ語を教えるという交換教授をしている。賢治は新しいレコードでシューベルトやベートーヴェンを聴くと、すぐにその楽聖たちの伝記や曲の解説を原書で読みあさり、知識に関する限りは、先輩であった藤原をたちまちに追い抜いたと言われている。また、花巻農学校の教師になったころ、その音楽熱は高まる一方だったことは、ベートーヴェンの交響曲第6番「田園」を作曲したころのベートーヴェンを真似て小岩井農場の小川のほとりを散策し、ポーズをとって撮影されている写真からもわかる。賢治は教え子を自宅に招き、レコード鑑賞することもたびたびあったとされる。その教え子が、賢治がベートーヴェンのピアノソナタ「月光の曲」をかけながら、円や直線や山形などのさまざまな図形が見えると説明したことを語っている。音楽に解説などいらないという考えであった藤原は、音楽にいろいろな情景や場面を勝手につけ加える自由奔放な賢治の解説をときに苦々しく思ったようである。それでも藤原は、賢治のことを「ワグナー、シュトラウス、ドビュッシーなどを鑑賞しながら彼は色彩と光を目からも耳からも感じた幸運な男であった」と書き残している。（板谷、1992）

現在、賢治作品の受容と再創造は映像化、画像化としてが主となっており、「雪渡り」も絵本として数多く出版されている。しかし、彼がこよなく愛した「音楽」との組み合わせによる作品の再創造では、あくまでも文章が主体であり、音楽が対等に扱われている例は少ない。今回の試みのなかで、バッハと賢治の作品はそれぞれが分断された形とはなったが独立性を保ち、どちらが主となったものでもない。演奏会終了後に行ったアンケートでの感想では「バッハと宮沢賢治がこんなに合うとは驚きました。」「子狐と子どもたちの楽しい世界にバッハの音楽とともに連れて行かれました。」「賢治の世界観、人生観をリズム感あふれる作品とともに、バッハの音色でよりいっそう表現され、感銘を受けま

した。」などの記述があった。賢治がベートーヴェンの音楽を愛したことは先に述べたが、二人の共通点は自然を愛したことで、人間の「本当の幸せ」を求め続けたことである。このことはまた、バッハ音楽の精神に共通すると考える。今後も賢治の詩文作品とバッハの共通性を探り、「読み弾き」を続けていきたいと思っている。

賢治のよく知られる「注文の多い料理店」序の「なんのことだが、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。」という言葉に導かれながら、賢治作品から多様にひろがる可能性を今後も音楽とともにさらに探っていきたい。

資料

北海道文教大学研究事業 西野美穂 ピアノリサイタル

日時：2016年3月8日（火）開演 18:30

場所：夢創館 主催：ロートス・ムジーク恵庭

プログラム

第1部 おはなしと音楽

「雪渡り」宮沢賢治 作

フランス組曲第5番ト長調 BWV816 J.S. バッハ 作曲

第2部 パルティータ第2番 ハ短調 BWV826 J.S. バッハ 作曲

2つのノクターン

第17番 ロ短調 作品62-1

第18番 ホ長調 作品62-2 F. ショパン 作曲

文献

Claud Lehmann, 1964, *Johann Sebastian Bach* (= 1972, 店村新次・浅尾己巳子共訳 『バッハ』 音楽之友社.)

堀内久美雄, 1993, 『J.S. バッハ』 音楽之友社.

板谷栄城, 1992, 『素顔の宮沢賢治』 平凡社.

宮沢賢治 絵／たかしたかこ 1990, 絵本 『雪渡り』 偕成社.

中川素子 大島丈志 編 2013, 『絵本で読みとく宮沢賢治』 水声社.

西野美穂, 2016, 3月8日ロートスムジークコンサート 北海道文教大学研究事業 『プログラム 西野美穂ピアノリサイタル』. ※資料参照

Ulrich Michels, 『図解音楽事典』 1989, 白水社.

山田吉郎, 2012, 『宮沢賢治 雪渡りと幼年童話』 鶴見大学紀要, 第49号, 第3部, 45-50.

楽譜

J.S. Bach, *Französische Suiten BWV812-817* WienerUrtext Edition 音楽之友社.

Kenji Miyazawa's Fairy Tale and Bach's Music

NISHINO Miho

Abstract: This is a record of my experiment with giving a piano concert. At the concert, I divided Kenji Miyazawa's fairy tale "Yukiwatari" ("Snow Crossing") into moderate passages for reading aloud separately, and then played each piece of "French suite No. 5 G major BWV816" by J.S. Bach according to the scene of the story. When Kenji Miyazawa's fairy tales are appreciated by children, they are generally told in the form of "picture books." At my concert for adults, however, music was used instead of pictures. Kenji Miyazawa is known as a European classical music lover, and he himself used to play the cello. I experimented with my own approach to inject a new life into "Yukiwatari" by combining the two works.